

series Salamander in the circle

リ・コンストラクション

第四部

第二十二章

Name is Meruno-2

峯村 明

リ・コンストラクション

登場人物

22・Name is Meruno-2

225.

226.

227.

228.

229.

230.

231.

232.

233.

あとがき

奥付

登場人物

ユミコ	竜門渕めるのの孫 西ノ宮奈々子の母
河西	竜門渕記念病院の看護士長
スクナ・コタエ	世界の果ての島の王に仕えていた兄妹

22・Name is Meruno-2

225.

「あたし、着物を着てたはずなんだけど……」

退院の相談をしながらユミコは あれ、どうしたんだろうと病室内を見回す。

「クリーニングに出しときました。シミになるといけないから。あの青磁色の着物、めるのさまの形見の、大事なものでしょ？」

山ほど仕事を抱えているはずの看護師長だが、することは速くて的確である。ユミコはため息をつきながら「ありがと」と礼を言う。

「退院用に、あたしの普段着を適当に見繕って持ってきたわ、おしゃれなユミコさんの趣味にあわないかもしれないけど。ま、我慢して」

「そこまで気が回らなかったわ！ ありがとう、ほんとに、なにからなにまで」

「いいってことよ」と、河西看護師長は男のような物言いをした。「入退院なんて非日常的なこと、誰だって気が回らないわよ。気にしない気にしない」

苦笑いしながらユミコはロッカーの中を漁る。着物用の肌着や紐の類。足袋から草履まで、けっこうな荷物だ。身に着けて帰った方が荷物が少ないかも、と思ったが肝心の着物がなければ……帯もない……帯もクリーニングに？

「帯……してなかったわよ」

「え？」

ユミコと河西看護師長は顔を見合わせる。

「してなかったって、あたし、どういう格好で担ぎこまれたの？」

「あなた、車椅子やストレッチャーはいらない、自分で歩けるって言い張って、車降りて歩いて来たのよ」

「——帯なしで——？」

「体締め付けない方がいいと思って、解かせてもらったって、宮司さんの奥さんが。男衆がなにかしたわけじゃないわよ。それに、男物の上着羽織ってたし、彼らが壁作ってたから、誰の目にも触れてないわ。安心して」

"彼ら"は壁を作れるほど身長が揃っていたのだが、それには訳がある。が、ここは""彼らの訳"より、ユミコの心情が優先する。

「うそ——」

青くなるべきか赤くなるべきか。一度は起き上がったベッドに再び倒れ込んだユミコであった。

226.

そういえば——車中で——横になるよう勧められたが、大丈夫だから、と言い張って体を起こしていた覚えがある。

だが空えずきはひんぱんにやってきて、幾度か胃液を吐いた。吐いてしまえば楽になるというわけではなかった。誰かに寄りかからずにいられず、粗い呼吸を繰り返していると、その人の手が背中をさすった。生理的な涙で顔はぐしゃぐしゃ、悪寒で震えがとまらなかった。

というのに、車椅子もストレッチャーも拒否して自力で歩くと主張し、病院へ入ったのだという——

たまたま居合わせた人たちは外国人三人組に圧倒されて誰もあなたを見てなかった、と看護師長は言おうとしたが、救いにもなんにもならないと思ってやめた。ユミコはまるで押しつぶされた和菓子かなにかのようにぺしゃんこの状態である。

「河西さん、あのひとたちは？」

「外国人三人組？ 行っちゃいましたよ」

とにかく——間宮神社へ行かなければ。行って、謝罪を——

「あ。車——」自分の車は間宮神社に置きっぱなしだ！

「ユミコさんの車なら、病院の駐車場よ。彼らのひとりが運転してきたのよ。帯はトランクの中。うわつついたアーティスト衆かと思ったらそうでもなさそうね、することがプロよ、ひとりがボスでふたりは手下ね」

彼女は自分で「ギャングかよ」と突っ込み、

「手下ふたりはちゃんと連携がとれてたわ、組織の中で働く人間の目には一目瞭然」

いいながら河西看護士長の目はサイドテーブルにとまった。「その忘れ物、どうする？」赤い布張りの表紙の本。

「……………」

黒髪の男が置き忘れたのだ。

手に取って見ると何か挟んである。このあたりのコンビニでも飲食店でも、どこにでも置いてある、観光用のロードマップ。そして、ボールペン。余白に流れるような筆記体で、"Kirigamine"

227.

居てもたってもいられず、退院した翌日に菓子折り持参で間宮神社を訪問したが、あいにく宮司は出張中とかで留守だった。玄関先で宮司夫人は心から労わってくれ、宮司からは今回の事はどうか気にしないでもらいたいと伝言があったという。そうもいくまいとユミコは内心想った。自分のしたことはとんでもない醜態であり、損害が出たことは間違いない。この種の仕事は二度と声掛けされないだろう。

あの日、割烹から持ち込んだ食器類はすでに引き上げられ、料金は即金で支払われていて、いたたまれないくらいだった。

もう自分のすることはない。

泣きたい気持ちでくちびるを噛んで帰途につく。川辺の柳は芽吹いて、枝先は緑色のもやがかかっているようだ。うららかな好天だったが気分は晴れない。このままマンションに帰って一人になるのも嫌で、思い切った。霧ヶ峰へ行こう。

観光用の道路は冬の間閉鎖されていてゴールデンウィークが始まるころまで通れないが、手前の八島湿原までは行けるはず。行ってみよう。

『キリガミネ探訪』を置いていった人も、もしかしたら八島まで行ったかもしれない。

それは六年前に桧山健たちがたどったのと同じルート、同じ季節だった。冬は終わり、桜が咲きかけていた。

八島湿原が近づくにつれ、ユミコは自分が夢うつつの状態にあることに気づかなかった。先日の灰色の白昼夢とは異なる、彼女の魂への道だった。

その人は草原のただ中で風に吹かれ、ユミコを待っていた。

修験者の行衣のような、ふしぎな服装をし、下駄を履き、もじゃもじゃの総髪とひげ、背中に琵琶のような楽器を背負っている。だらりと両手をさげて立ち、ユミコを見ている。どう見てもあやしい人間だがユミコは恐れげもなく近づいていく。近づいて、そばへ行って、敬意をもって、挨拶をしなければ。この人は——特別なひと。自分の運命を変えたひとなのだ。名前は——

「スクナさま」

スクナはまじまじとユミコを見た。「久方ぶり。まことに久方ぶりであるな。メルノ」

「めるのは祖母です。私はユミコです」

表情のなかったスクナのおもてがふっと和んだ。「それはな、今生のそなたの名にすぎぬ。そなたの魂はメルノという名」

「……？」

「思い出せぬのも無理はない。長い時間が流れた。私はそなたにメルノと名乗るのを禁じた」

「——どういことですか——」

「私のことは覚えているのに、自分のことは忘れたか。」

メルノは追われていたからだよ。追われ、メッサナの北の湖沼地帯へ追い詰められ、泥沼に追い込まれた」

「あ」と、思わず声がでた。泥沼の中でもがくあの悪夢は、あれは夢ではなかった。夢ではなかったのだ！

沼に至るまでに、おそろしい過程があった。ユミコはその過程を体験していた！

憎悪と侮蔑をはらむ拒絶の目が自分を見、彼らがあげているのは激しい怒号と口汚いヤジだ。

観衆のまなざしと発せられる声に体を引き裂かれる。信じてきたものがいっせいに向こう側へ行ってしまった。こっちには誰もいない。大勢の冷たい眼差しの下に己の尊厳のすべてを引きむしられ、踏みにじられる。恥辱と絶望の乾いた泥沼。叫ばずにいられない。叫ばなければ——壊れる。気が狂う。

気が狂う！ 叫ぼうとしてユミコは口を開けた。

「メルノの魂が抱えた古い傷だ。だがな、その古傷ゆえに、そなたはメルノだともいえる。その傷はメルノであることの証——」

叫ぶ代わりに懸命に抗弁した。足は勝手に後ずさり、顔がゆがんだ。
「いりません、そんな……証なんて！ あなたはあんな恐ろしい目に遭ったことはないでしょう！？」反発を抑えきれない。「知った風なこと、言わないで！！」

「そなたは私がスクナだと知っている。自分がメルノだということもわかっている」

「やめて！ やめてください！！ あたしはメルノじゃない！ そんな名前じゃない！！」

リンリン……と、鈴が鳴るような音がした。リンリン……リンリン……
人の声だとわかるのにしばらくかかった。彼女の興奮をなだめるように、鈴のような声音が彼女を呼んでいた。

「メルノさま——」

「あなたは——」

「辛う、ございましたな——メルノさま」

そのひとはゆっくり近づいてきて、そっとユミコの手をとった。優しいまなざし。あたたかな手。あたたかな……

強い陽射しを浴びてそびえる壮麗な台形ピラミッド。爽やかな青い色に彩られた建物。地面に濃い影を落とす南国の木々の大きな葉。からりと乾いた風が吹き抜けて肌をなで、髪をもてあそぶ。みずみずしい匂いは花か、果物か。人々は明るくさざめき、また熱心に言葉をかわす。石造の巨大な都市であるにもかかわらず、無機質な雰囲気はなく、なんぴとをも受け入れる。懐が深く、柔らかく、あたたかい。

イメージは鈴のような声音の女性の手から流れ込んでくる。そこはメルノの生まれた地。

「あなたが教えてくれたのですよ。メルノ」

「……私が……」

彼女は裕福な家、裕福な一族に生まれた。一族が住んでいたのは城のような、とも、大劇場のような、ともいえる邸宅だった。そこはありとあらゆる芸術の殿堂で、多くの人が集まり、また出入りしていた。

彼女がなにげなく口ずさんだ歌を、ある人が聴いていた。その人は「ちゃんと歌ってごらん」、と言った。それは人を鼓舞する類の歌ではなく、深く沈潜させるものだった。街角で歌うと人々の足が止まった。集まり、静まり返る人々の中で歌う。人々は打ちのめされて散っていく。人々は活力を奪われるのではなく、洗われる、と感じた。めるのの歌には不可思議な力があつたのだ。

ちゃんと歌うよう、勧めてくれた人はいなくなっていた。「留学を延長できないか、父親を説得してくる」、と言い残して。けれど、その人は戻ってこなかった。助けてほしかったのだ。けれど戻って来なかった！ 助けてくれなかった！！

両手で髪を鷲づかみにし、頭を打ち振り、幼児のように身も世もなく地団駄踏んで絶叫し続けながら、そんな怒りとも失望ともつかない恨み言が胸の奥底に澱のように沈んでいたと気づいて、メルノは驚く。

「事件が起こったのだ。世界中を揺るがす事件が。彼は父親の副官として、己の使命を生きなければならなかった。彼の強い責任感と誠実さがそうさせたのだ。私は彼の強さも弱さもよく知っている。けっして、そなたを見捨てたのではない。そういうことができる男ではない」

「そして、そなたはくにを追われた。そなたの歌が人々に及ぼす影響が、あまりに大きかったからだ。そなたの才能を怖れた者が、そなたに恐怖心を与え、さらにはそなたを通じて恐怖心をばら撒こうとした。

それゆえ……そなたはメルノと名乗ることをやめ、歌わないことに同意した。メルノはいなくなった。そうさせたのは私だ。恨む相手が必要ならば、私を恨め」

「……………」

「そなたの祖母がそう名乗ったのは、竜門淵の人間が負った使命を終わらせるという、特別な役目があったからだ」

鈴の声音の女性がずっと、手をさすっている。前にもこんなことがあった。動転した。恐怖の記憶に動転した。助けようと手を差し延べたスクナをさえ巻き込んだ。あの時もこの女性が駆けつけ、助けてくれた。そしてこうやって慰めてくれたのだ。

どっと涙があふれた。昂った感情は浄化されなければならなかった。ユミコは声を放って泣いた。
「コタエさま——！！」

230.

「時代が下るにつれ、人間の魂は己の肉体の中に沈んでいく」

スクナは語る。

「己の五感と周囲の物質こそが真実だと思い、五感が知覚するもの以外はあり得ないもの、絵空事だとすら思う。ユミコさんや。そなたがメルノなる者が自分とは無関係だと思うのは無理もない。そなたは泥の沼で体を失った。しかし意識は残っていて、かつて持っていた容姿と違うと認識する。そのこともそなた自身がメルノであることを受け入れ難くする一因であろう。さよう、そなたの身体は別人から譲り受けたものだ」

「……………」

「思えば短い間だったが、その身体の元の持ち主とそなたの意識は一時肉体を共有していた。いや……、彼女は己の体内にそなたを匿った。メルノではなく彼女自身の名を被せた。何故？ そなたを恐ろしい追跡から守るためだ。覚えているだろう、ミツハのことを」

ああ、とユミコは喘ぐ。覚えている。そのひとのことを。彼女の肉体のおかげで自分は見ず知らずの異邦にあって、なんの問題もなく受け入れられた。むしろ、彼女の足を引っ張ることがあった。常に凜と背筋を伸ばしているミツハに対し、恐怖や未知のものに対して尻込みしてしまう傾向、脆弱さ、もっといえば……甘えが、メルノにはあった。

「ミツハさんはどうなったの！？ この体はミツハさんのものではないの！？」

「遠い昔、ミツハはミツハ自身の役割を果たすために行ってしまった。その身体はそなたに譲られたのだ。ミツハに肉体は必要なかったのだな。しかし時折、戻ってくることがあった。たとえば、そなたの娘の身体を借りて」

「あたしの娘ですって？ ……まさかナナコが！？」

「そなた、メキシコちうところで病気になっただろう？ 日本へ連れ戻したのは娘の力である」

「ナナコがあたしを守ってくれたというの！？」

「うむ。人間、肉体に深く入りこんでしまうと、精神は柔軟性を失くす。ありていにいって、頑固になる。ものごとに懐疑的になり、否定的になる。たとえば、ユミコさんや、そなたは匿われ、守られていたという事実が見えなくなり、それが当たり前になっていたのかもしれない」

スクナの言いようは辛らつだったがユミコに反発する気は失せていた。

「あたし——娘を失くして、離婚して、ひとりになって、でも、しっかりしなくちゃ、って、ずっと気を張ってた。いいえ、人の目を気にして、後ろ指さされないように、バカにされないように、舐められないように、親切にされるのは下心からじゃないかしらなんて、そんなことばかり考えてた気がする。美容院に通って、化粧品を変えて、服装に気を遣って、——見栄を張って——舐められまいと！

——あげく——あたし——あの方にひどいことを言ってしまった——」

「あの方、って？」、とコタエ。

「あの、黒髪の方です、あの方はご自分の秘密を打ち明けてくださったのに、言いたくなかったでしょうに、あたしったら——」

「その方のお名前は？」

「知らないの。あの方は名乗らずに行ってしまったわ」

「知らなくはあるまいよ。ユミコ」

「いえ！　ほんとうに！」

「そなたは名前を聞いたのだ。聞いたかった名前だったのだ。だからかつてなかったほどの鮮明さで、古傷が浮かび上がったのだよ

231.

スクナは楽器をつま弾いている。三弦琴で、カダガキ、というひじょうに古い楽器だ。メルノは彼がこの楽器の名手であることを知っている。彼女自身も弾いたことがある。スクナから借り受けて、ダイダラボッチを慰めたのだ。

世界の果ての島の、原初の楽器、原初の音色、原初の音階。

「私はそなたから歌うことを取り上げた。そなたを守るためとはいえ、そなたにとって死ぬより辛いことだっただろう。歌うことはそなたの本質、生きる力そのものだったというのに。私はそれを封じてしまった。しかしそなたは私の進言を長きにわたり、忠実に守った。メルノよ。すまなんだ」

スクナは神のように峻厳で、慈悲深い。その声とカダガキの素朴な音色がユミコの魂であるメルノを包んでいる。音はメルノをその存在の根底からかきたてるものだ。

「さあ」とスクナは言う。「歌ってみなされ」

「肉体の傷はいずれは治る。されど魂の傷は容易には……。

メルノよ。魂に不条理に、また理不尽につけられた傷を癒す力がそなたにはあると、彼はそう感じ、見抜いたのだ。彼の目はたしかだった、彼の言う通りだったと、そなたもわかるだろう？」

なにかがこみあげてきて涙で目が曇る。哀しみとも歓びともつかない感情。

歌うことによって、人々が受け取るもの、メルノ自身に起こるもの、それは別々のものではなく、同じものだった。あの一体感がまざまざと呼び起こされて、体を揺るがす。そして、衝動へと変化する。

「歌うことは傷を抱えた人々を慰め、そなた自身を自由にするであろう。さあ……」

もう大丈夫と礼をいい、ユミコはコタエの手をそっと押した。大丈夫。ひとりで立てる。立ってみよう。メルノとして。

黒い短髪の男がエレベーターから降りてきて、せかせかした足取りでエントランスへ向かう。
「困った困った——！」独り言はイタリア語だ。

ふだんならばインフォメーション係のブリジッタが、「どうしたのよ、アントニオ？」と、イタリア語で合いの手をいれてくれるところだ。しかし今日はその場所は誰もいない。日曜日はH&L財団本部もお休みなのである。

それでアントニオ=パウジーニは独りで「困った困った——！」を繰り返していた。

ヒヤマからの電話を受けたのは二日前、金曜日のことだ。市内のホテルからで、二日後に本部ビルを訪問したいとの、短い内容だった。

金曜日の二日後といえば日曜日、すなわち今日で、表向き本部の業務は休みなのだが、「ノー」と言う理由はなかった。

そこで今日になって迎えの車を差し向けようと、宿泊先のフロントをコールしたところ、当人は出かけた後だったというわけだ。

「参ったなあ！ ご自分でタクシーを拾われたのかな。言葉、通じたかな」

ベルギーで主に使われるのはオランダ語かフランス語か、そのあたりだ。財団では共用語として英語も必要ではある。イタリア人のパウジーニは言語には少々苦勞した。彼には外回りから本部内勤に移ったという社歴がある。

というのも、『財団総裁のために命がけで仕えよ』という、彼の祖父の勇ましい遺言ゆえなのだ。それは遺言であるだけでなく、彼自身の信念でもあった。六年前、まだ雌伏中の"将来の総裁"そのひとにぐうぜん接する機会があって、一目ぼれしてしまったのである。いや、一目でわかった。この人だ！ と。

そしてとうとう、『その人』に会う日がやって来た！

手を揉みながらせかせかした足取りで歩き回る姿は伊達なイタリア男ぶりを少々損なってはいたが、パウジーニは興奮し高揚し、内心、それはそれはわくわくしていたのだった。

一方……

同じ財団本部ビルの、別のフロアで、暇をもてあましている人間がいた。

(たいくつだ……)

財団は世界の各地とネットワークしているため、相手の現地時間と時差ができてしまうことがある。彼の退屈は数時間の時間調整の所以だったのだが、出勤している人間が少ない日曜日とあっては話し相手にも事欠くというもので、退屈も致し方なかった。

この地で暮らすようになってもなかなか慣れることのない曇りがちの灰色の空は、気を滅入らせもする。

(おふくろお……おやじい……今頃なにしてるかなあ……)

すこしばかり感傷的な気分でコーヒークップを片手に窓の外を眺めていた時、場違いな物音が耳に入ってきた。子どもの声、足音だ。

そして——視界の片隅を横切る黒い、カゲ——

233.

観光客が入り込んだのかな、と彼は思った。財団本部は、ビルとは、実は程遠い。由緒正しいラウレンス家の所有物で、ブリュッセルの近代的街中にあっても外見はお城なのだ。

城の中に最新の電子通信システムを取り入れ、外側を最新のセキュリティシステムが防御しているのだが、外側からはもちろん、そんなことは判る由もない。観光用に開放されているものと思って入り込んでくる観光客が時々いる。

(日曜日なんか、玄関、閉めときゃいいのにさ)

まったく、ラウレンス先生のすることはよくわかんねえや、でもなんか意味があるんだろとぶつぶつ云いつつ、彼は音の聞こえる方を向いて喫茶室の椅子から立ち上がった。

廊下のちょっと先を小さな人影が横切った。四歳か、五歳くらいか、小柄な幼児がひとり。なんだ迷子かよと思いつつ、「あ、おい、ちょっと待ちな！ ぼうず！」と口走ってから苦笑いする。とっさの時にはつい母国語がでてしまう。

とにかく英語を使っておけばなんとかなるものだが、彼は中学も高校も英語の成績はからきしだった。ドイツ語やフランス語など完全にお手上げた。それで結局日本語に逃げてしまう自分にうんざりする。ベルギーの都会の真ん中で日本語が通じる相手などそうそういるわけないのだが。幼児はいったん入り込んだ廊下から戻ってきて、喫茶室の入り口に立っている彼を見て、「ぼくのこと？」と英語で言った。

彼はなんとなく、カチンと来た。この幼児は日本語を聞いて英語で応えたのだ。
(かわいくねー) 彼がこっちへ来いと手招きすると幼児は恐れ気もなくすたすたと歩いてきた。
「なにか用？」

いくらか舌足らずの、日常使い慣れた風の言い回しの英語。黒髪と黒い目は東洋人を思わせるが、顔立ちがちょっと東洋系の人間と違う。
(あれれ、なんかさ、秘書室のパウジーニに似てねえか？ こりゃ、もしかして)
いつも澄ましているパウジーニの奴の隠し子かなんかかとあらぬ妄想を抱いて、彼はついになまりとほくそえんだ。

幼児はそんな彼をそばで見上げて懽然とした顔つきで、ぼそっと日本語でつぶやいた。「おじさんきもい」

ほくそえんだままの顔が、引きつった。「なな、なんだとー！！？？」

幼児は彼の反応に逃げ腰で後ずさりしながら尋ねた。「ええええーと、トイレはどこ？」

彼は引きつった顔でたたらをふみながら幼児の後の方、廊下の奥を指差した。「あそこ！！」
幼児は礼をつぶやきながら背中を見せる。そこには何か——彼の注意を引くものがあった。深緑と水色のチェック模様のリュックサック——そこで何か、揺れた。
ファスナーのスライダーの引き手に結んである、小さな長方形のもの。
その縦と横の長さの比は妙に懐かしく、郷愁の思いを誘うものだった。つまり、いつかどこかでそれをみたことがあるのだ。

彼はかがみこみ、小さな長方形につと手を伸ばしてつまみあげた。(——神社のお守り？)
幼児はその気配に気づいて、からだごとぱっと振り向いた。
ぶちっと手ごたえがあって、彼の手の中に長方形が残っている。
幼児の動きが急で激しかったので、スライダー引き手とお守りを結んでいた細い組みひもが千切れてしまったのだ。それよりも彼はお守りに興味を覚えてよく見ようと目の高さまで手を持ち上げた。
「ああっ！！」と高い悲鳴。「返して——！！」

彼は無意識に空いている方の手を伸ばして、飛び掛ってくる幼児のおでこを押さえた。動きを封じられた幼児はまた悲鳴をあげる。

「やかましいぜ！ おとなしくしてろよ！」

お守りに夢中の彼が自分のしていることを棚に上げて口走った、その時。

階段を駆け上がってくる足音。そして現れたのは若い男だ。こどもと青年が何か取り合ってもみ合っているのを見て怪訝な顔をする。

おでこを押さえられてじたばたしている幼児をはさんで、二人の男は互いの顔を見る。互いの顔に驚愕が浮かび上がってくるのを見る。

ふたりは同時にうなった。

「おまえは——！！」

「てめえは——！！」

22・「Name is Meruno-2」

23・「In Brussels」へ続く

あとがき

公開が週一になってる…

スクナーコタエ兄妹、久々の登場。

スクナさまの三弦琴は、『宮の垣に茂る葛（カダ）を掻く糸すすきにヒントを得て イサナギが造った』、とホツマツタエにあり、ホツマの中でも五回ほど言及されています。うち、一回がスクナさま。この時代の方々は半神半人といいますか、時が来れば…二百万年くらい物理的に生きて…ちゃんとお亡くなりになってます。

ですが、こういうお人は、バイロケーション、複数の場所、複数の時間に同時に存在することができます。シュタイナーの言葉でいう秘儀参入の部類と思われます。ふつうの人間にもできるそうですがハードルは…とっても…高そう。

表紙の画像はホントにロードマップ。中央上あたりのハート型部分は八島ヶ原湿原。

アラウンドフォーティ二人の関係はもう本人たちに任せることにして、舞台はやっとブリュッセルへ！

2025年7月21日 記

奥付

リ・コンストラクション

第二十二章 Name is Meruno-2

2025年 7月24日初版発行

著者

峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材

[イラストAC](#)

制作

Puboo

発行所

デザインエッグ株式会社